

## 内と外の境界に亡霊たちを迎え入れよう

### 著書紹介『知の教科書 デリダ』（講談社メチエ、林好雄と共著）

廣瀬浩司

ひとはつねに境界をひとつひとつ越えながら生きています。とくに成長する過程においては、ある集団に入ったたり出たりする訓練を繰り返します。境界を越えることは、このうえない喜びであることもあるでしょうし、またたとえ排除されはしなくても、深く傷つけられることもあるでしょう。またひとたび境界を越えてしまったとき、内部に安住し、外から境界を越えてやってくる人を無意識に排除してしまうこともあるでしょう。こうして境界を越える喜びと苦しみは、いつしか習慣や慣習の中に埋もれていく。しかし境界を越えるときこそ、ひとは新たな装いをまとい、身ぶりやスタイルを変化させていくのですから、境界の経験はそのときは無我夢中であっても、けっして忘れられることはないでしょう。それはいつしか私たちの心と体に深く染みついているのです。

境界を越える喜びと苦しみ、受け入れられた喜びと排除される苦しみ、新しい習慣やライフスタイルを身につけること、そこに安住し、日々同じ身ぶりを繰り返してしまうこと、こうした経験は、成長のために必要な儀式であるばかりではなく、いつでもどこでもころがっているのではないのでしょうか。境界とは、内部と外部を隔てるものにほかなりませんが、この区別は、ひとが毎日のように歩き、人と会い、言葉を交わしあい、友情を深め、憎み合うとき、どこにでもあるのではないのでしょうか。文化とは、国家や伝統の集合体などではなく、こうした境界の綱目から作られているものなのではないのでしょうか。

ここで奇妙な仮定をしてみましょう。もしこの世の中が境界だけだったとしたら。あるいは線を越えてしまうときの喜びと不安に身をこわばらせたり、何かに強制されたりして、いつまでも境界の上になければならぬとしたら。線にすぎないように見えた境界のなかに、身体が埋没し、幾重にも寄り合わされた糸のように身体に貼り付き、身体が線を越えようとしているのか、それとも線が身体を取り巻いているのか、わけのわからないような状態になったとしたら… そんなとき境界は、たんなる一過性の儀式や文化的伝統を守るためのものだけではなく、私たちの心と身体を異常なテンションの高さにおいて維持するような、おそろしくも魅惑的なものとして現れてくるでしょう。

もちろん誰もそのようなテンションの高さをつねに維持することはできません。ひとはあるときは内部に居坐り、あるときはさっそうと外部から内部に入り込んだり、入ることをあきらめたりして、生きて行かなくてはなりません。しかしあえて内部でも外部でもないような境界地帯に積極的に身を置き、解きほぐしを繰り返して生き続けた思想家がいます。20世紀フランスの思想家ジャック・デリダです。そのために彼は、身にまといつく境界の綱目をなぞるようにして、まさに境界の綱目のような奇妙な（しかし一度触れると癖になる）文章を数多く書き続けました（これだけでもフランス語を勉強してよかったと思います）。

ここではひとつだけ具体例を挙げましょう。デリダは、ヨーロッパで移民問題が緊迫したとき、他者の「歓待（ホスピタリティ）」という伝統について考えをめぐらせました。歓待とは、外部から助けを求めてやって来た人を無条件に家に泊めたり、都市に匿ったりすることで、日本でも「まれびと」信仰というものがあります。

「たとえばあなたの家に外国人らしき男が、片言の日本語でかくまってくれと言ってきたとする。あなたの家の敷居をまたごうとする男にあなたはどうか対応するだろうか。日本では日本の法律に従えと言って扉を閉ざし、すぐ警察に電話するだろうか。それとも、とても悪人とは見えず、何か事件に巻き込まれているようにも思われる男の様子を見て、ひとまず事情を聞くために扉を開け、身に覚えのない罪で追われているのだったら、しかるべきプロセスを踏んで出頭し、無事に本国に帰るよう、説得するだろうか。そして彼が自分の犯罪は社会正義に基づくものだと主張したら、あなたはそれに共感し、「寛容」にも彼を家の奥に招き入れるかもしれない。だとしてもこの寛容は社会正義への純粋な共感だろうか。そこにはヒロイズムや自己満足が隠されていないか。反対に、ひとたび招き入れてしまった男が、実は残忍な殺害者であり、あなたの家族を人質に取り、家の平和を根本から破壊してしまう可能性はないのだろうか。少なくとも共犯者となってしまう不安が頭をよぎらないだろうか。しかし、ひょっとして、男はじつは神であって、彼を招き入ることが、あらゆる善悪や法律や危険の可能性を越えて、人間として、市民として必要な行いであったとしたら、すべての異人や客人を無条件に「歓待」すべきなのではないか。そのほうが結局は「得」なのだから」（178頁以下。文章を一部改訂しました）。

こうした問いを発するときにはデリダが意識しているのは、移民や難民、強制移住させられた人々、無国籍者などの庇護の問題です。デリダがゼミナールをおこなっていた頃には、フランスにおける移民の問題が緊急事項となっていました。「移民の波を統御する」という名の下に、フランス政府は、滞在や労働のための許可証を持たない「不法な」移民に対する規制を強めていたのです。

ここでは詳しく紹介できませんが、デリダはこうした問題を、現代において、公共空間と私的空間との関係が、根本から変質してしまったことに結びつけています。伝統的な歓待が行われていたときには、私的空間と公共空間の区別がはっきりしていました。歓待が行われるためには、私的空間が安定していて、そこに余裕をもって外部の人たちを迎え入れることができなくてはなりません。ところが「携帯電話やインターネットの例を挙げるまでもなく、現代の通信技術は伝統的な公私の区別を混乱させたり、ときには逆転させたりし、歓待の空間そのものを解体させてしまった。私的空間を拡張させてくれるはずの通信技術によって、逆に安全なはずの私的空間が犯罪やウィルスや歓待することになり、外部からの侵入に対する危機管理やセキュリティへの関心、さらには異者の排除意識を強めることになった。警察＝治安は、まさに公的でも私的でもない空間において亡霊的に広がっていく。現代のネットワークと警察のネットワークは、同じ広がりを持っているのである」（182頁、文章を改訂）。このような世界においては、ひとはだれでも、たとえば家の中につながれたネットワークにおいて、そしてふと出かけた場所において、上の男のような人に遭遇することもあるし、また自分自身がそういう人になってしまうこともあるのです。そのときどうすればよいのか。答えは単純ではありません。

デリダの思想はこのように、問題をぎりぎりまで突き詰め、思わず叫び出したくなるくらいに、

矛盾に矛盾を重ねていきます。しかし、考えてみてください。現代社会におけるすべての問題は、刀で結び目を断ち切るような具合には解決できません。そんなふうにしたら、かえって矛盾は深まるばかりです。ひとはあるときは男の立場に、あるときは迎え入れる人の立場に立ち、くると立場を変容させながら、絡み合う困難な問題の糸をひとつひとつ解きほぐしていかねばならないのです。デリダの文章を読むことは、このような解きほぐしの訓練にほかなりません。

こんな説明では、迷路の中に放り出されるような気になるかもしれませんね。迷路から抜け出すためのヒントを、ひとつだけ紹介しましょう。それは「あたかも外から来たかのようにして中から入ること」というデリダの奇妙な言葉です。彼は内と外との境界が膠着してしまうことをなんとか避けようとしているのですが、実際のところ、そんなことは可能でしょうか。

しかしながら、あなたが家に帰って、何かが変わっているような奇妙な印象がするような経験をしたことはないでしょうか。親しい我が家のはずなのに、どこかが違う。なにかがあなたの神経を刺激し、外に押し出されるような気がする。扉を開けて中に入ったのに、そこが危険な街路であったかのような、なにか身体の内と外とがねじれて裏返るような奇妙な感覚がする。だが誰かが押し入った形跡もなく、何も異常はない。自分の部屋にさえたどり着けば大丈夫だろう。そうして部屋の扉を静かに開け、ふと右手の鏡に映った自分の顔を振り返って見たとき、鏡の中のもうひとりのあなたに優しく見つめられ、「我が家にようこそ。私はあなたのことをずっと見ていたけれど」と迎え入れられる。そのときあなたは「あたかも外から来たかのようにして中から入ってきた」亡霊の姿を目にすることでしょう・・・ あれ、移民の話でしたね。ますます煙に巻かれたような気がした人は、冒頭の教科書、またはもうひとつの著書『デリダ——きたるべき痕跡の記憶』（白水社）も参照して下さい。

ついでに付け加えるならば、現代日本における制度疲弊の原因のひとつは、「(自称) アメリカ的モデル」の空疎で自己満足的な乱用と、それに対する日本的集団の不毛な往復運動にあると思われれます。その狭間にあるヨーロッパ的な知は、たえずみずからの存在根拠を掘り返して活性化していくポテンシャルを持つものとして、やはり狭間で苦しむ皆さんの知的関心に応えるものであるに違いありません。

こうした課題に私なりに取り組んだ授業についてはホームページ（筑波大学「オープンコースウェア」）の頁、または「廣瀬浩司」で検索）をご参照下さい。他の一般向け共著には、『ノイズとダイアローグの共同体』（川那部保明編、筑波大学出版会）、『哲学を使いこなす』（知泉書館）、『纏う』（水声社）。訳書デリダ『歓待について』（産業図書）などがあります。